

新聞部長山下慎一郎叢書 ①

抜擢

作画 藤堂俊介
SABO





登場人物紹介

第一回 合格発表

第二回 入部

第三回 初めての取材

第四回 忠入部

第五回 ささいな言葉

第六回 三球勝負

第七回 自分らしく

作者作画担当から

48 30 21 13 7 4 1



登場人物

やましたしんいちろう
■山下慎一郎 県立東高校一年生
主人公。物語は彼の視点で進められる。
新聞部か柔道部にしようと考えたあげく、
新聞部へ。消極的な性格だった彼が、
新聞部を通じて変わっていく。



かわのただし
■川野 忠 県立東高校一年生
山下の幼馴染み。中学時代は野球部で
活躍し、東高でも野球部に入ったのだが。
趣味はカメラ。英語は苦手。



わかのみさこ
■若野美佐子 県立東高校一年生
同じく山下の幼馴染み。回りからは山下
の彼女と言われている。両者とも良い
友達と言っている。新聞部に真っ先に
入部し、資料整理から取材までこなす。

紹介する語
し登に
ま場登
す人場
。物す
をる

【東高新聞部】 東高創立から60年近く続く、伝統の文化部。
個性豊かな上級生たち。



さわむらかよ
■沢村加代
三年生。信望が厚い
部長。記者としても
有能。



おかゆうこ
■岡 祐子
三年生。写真担当。
腕はプロ級。沢村と
組んで取材する。

たけもとしうた
■竹本翔太
三年生。副部長。
部員をしっかりと
まとめている。



わかばりょうすけ
■若葉良輔

二年生。新聞発行を
パソコン化した一人。
ある事で山下と騒動に。



みはらけいすけ
■三原啓介(左)

おおはしめぐみ
■大橋 恵
二年生。カメラが趣味。岡を師匠と崇める
写真担当。



【柔道部】 県下の強豪に名を連ねている部。 山下が体験取材として練習に

参加している。

まつむら
■松村先生

保健体育教師かつ柔道部監督

六段。生徒たちの信頼もある。

山下が理想とした人である。



むらいとかゆき

■村井貴幸

三年生。主将。体格がよく柔道も強い。二段。

ある言葉で、掛かり稽古中に山下から倒される。

【野球部】 甲子園代表を西高校毎年争っている。川野も入部したが。

おおうら

■大浦先生

東高卒の野球部監督。

今年のチームは、良い仕上がりと評価する。

担当は松村先生と同じく保健体育。



まるやまさとる

■丸山 悟 (左)

いらばやしよしのり

■伊良林義徳



共に三年生。丸山は主将。一塁手。練習は少し厳しさもあるが、普段はやさしい。
伊良林投手は、ストレートを武器とする。山下と体験取材で三球勝負をする。

【山下の同級生たち】



はやししんいち

■林 真一 (左)

たなかとしゆき

■田中利幸

隣町からバス通学している。入学の翌日に山下に声をかける。同じ新聞部。田中は山下と似て小さく瘦せている。なぜか彼はいつも遠慮がちである。

わだこうた

■和田浩太 (左)

さなだたかひろ

■真田孝浩

柔道部の和田は、中学時代山下に体力をつけるために柔道を勧めた。

真田は消極的または落ち込んだ山下を励げます存在である。



三月十六日

県立東高校の

合格発表日。

僕こと山下慎一郎、幼馴染みの川野忠、それに若野美佐子の三人組は、受験番号票を持ち発表を待っていた。

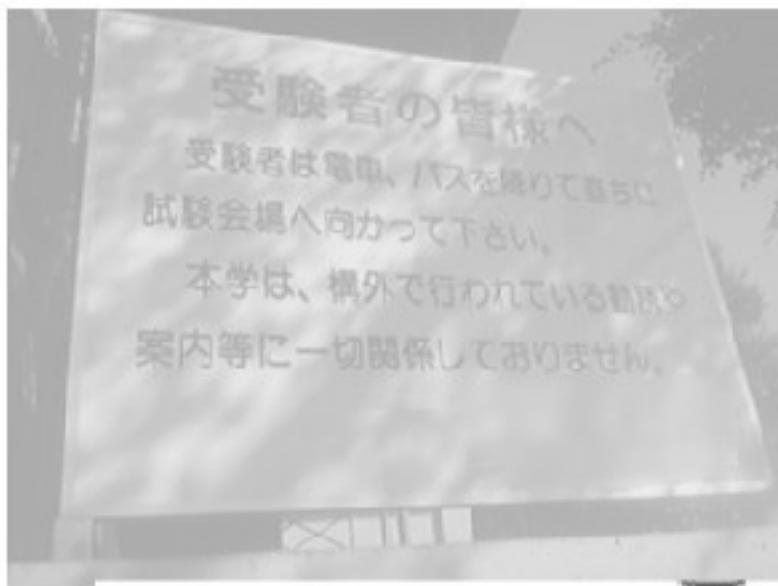
心配の表示が募っていた。発表まであと一分。掲示板を持つて来た。とても長い時間が流れた気がした。掲示板が立てられ、すぐに僕たち三人の番号が見つかり、おめでとう。抱き合って喜びを表した。

忠は、苦手な英語がうまくいってなかつたようだ。落ちたらどうしようの顔をしていた。

美佐子は、

大丈夫。三人で一生懸命勉強したから……。忠を励ましている。

それでも忠は、詰襟の制服の胸に手を当てて



不安もあるけど、今は合格の喜びが勝っていた。

忠は、「受かった！」の声をかけ中学時代の友人、真田孝浩君、和田浩太君も、

「忠と通えない高校生活なんて」なんて言いながら、合格の喜びを称えあつた。

中学時代は、やせていて、背も一番低かつたから、引っ込み思案なところあつたけど、

「勇気と度胸、

美佐子にかつこいいところを見せよう」との和田君の勧め

で、柔道部に参加して

体力をつけた。

柔道の本を買い込み、受け身をすぐに習得して、立技、寝技も

覚えた。もちろん、筋力つけるトレーニングや走り込みも十分にしたと思う。

一通り覚えると、強くなりたいと欲が出る。僕より背も体重もある和田君を練習試合で投げ飛ばすと、回りからすごいと歓声が上がつてからは、度胸がついた。

そんな中、くじ引きで、生徒会副会長の立候補が決まった。

新聞部長山下慎一郎『抜擢』 第一回 合格発表

作：藤堂俊介
画：SABO



忠の応援演説があまりにも
受けてしまったおかげで
当選してしまった。
彼いわく、

みなさま、
こんにちは。

は、ウケ狙いじゃなかつた
のにななどと言つていた。
真田君に言わせれば、

「あれは狙つていたよ。

川野のやりそうな

ことだから」「だと振り返る。それでも自信がついた僕には、よい経験につながった。

おやま

おにふ

桜が咲き、花びらが舞い、ほのかな香りに包まれた入学式。
憧れのブレザーの制服に袖を通した。

会場に入ると、僕に視線を集める生徒たちがいた。別の中学校の出身者ようだつた。身長が一番低かつたから、目だったのかな。



とても驚いている表情
が、多かつたような気がする。

新聞部長山下慎一郎『抜擢』

第二回 入部

作：藤堂俊介
画：SABO



式は一時間ほどで終わり、クラスも決まった。あとは部活。引き続いて柔道部へ来ないか和田君から誘われた。

父が新聞社の生活文化部の新聞記者をしていました。去年の社会科見学でそこに行き、輪転機の迫力と、仕事ぶりのかっこよさに憧れていた。

東高校創立から文化部の新聞部へ行きたい思いが強くなつていた。

僕の願望、気遣う、和田君を立てるか。考えてみると妙案が浮かんだ。



入学式の翌日、和田君に僕は、新聞部に入ることを伝えた。

「和田君。僕、新聞部に入るよ」

「山下が決めたことだから、いいよ」

和田君は笑つて了承してくれた。なら、昨晩考えていた案を安心して言える。

「体を鍛えるために、

参加してもいいかな」

「監督の先生に聞いてみる」

「ありがとう」

良かつた。僕の考えを理解していた。

後は、新聞部に入部してからそのことを部長に伝えよう。



「慎一郎君。新聞部へ入るの？」

美佐子は僕のところに来た。

「美佐子は」

「私も同じよ」

「そうなんだ」

「文化部で興味あつたから。慎一郎君は和田君と同じではなかつたの」

「父の仕事に憧れたから。和田君には言つてきたよ」

「それでどうだつた」

「笑顔でいいつて。

その代わり、僕、

時々練習にいく

ことにしたんだ」

「慎一郎君らしいね。

部長には言つたの」

「まだなんだ」

「なら、入部届出し
ていないのなら、

先に伝えておくね
「ありがとう」

入部届は、まだ出していなかつた。書いてから部長に伝えよう。

部室は、校舎横のプレハブの中にあつた。新聞部の他に、天文部、漫画同好会、演劇部が

入つっていた。目的の部は入つてすぐになつた。

部室には三年生の女子生徒と、その横で男子生徒が談笑して

いた。

「あの…新聞部に入部
したいのですが…」

少し緊張していた。女子生徒の沢村さんが、僕のこの言葉にすぐに反応した。

「はじめまして。部長の沢村に、隣が

副部長の竹本です」

沢村さんと、竹本さんの出会い。一人は、尊敬する先輩となつた。この時は、まだ、初対面だったから、何も分からなかつた。

「山下慎一郎です。よろ

しくお願ひします」

「君が山下君。若野さんから入部の話聞いて

いるよ」

竹本さんが、僕に視線を合わせていった。

「友人の和田君と中学の時から、体力をつけるために、柔道をしていました。僕は、やせていて体力をつけたいんで時々練習に参加してもいいでしょうか？」

沢村さんは、『いじょ』の表示を見せ、竹本さんは、

「若野さんから聞いたよ。

大丈夫。新聞部は、そんなに忙しくないし、他の部に行くのも取材になつて、とてもよいね」

の一言で了承してもらつた。独特なやさしい言い回しのこの言葉は、今でもはつきり記憶に残つてゐる。尊敬している理由はその他にもあるけど、僕のことを思つてゐることを、感じ取つていた。



最初の練習日。同時に最初の新聞部の取材監督であり、保健体育の松村先生にあって、僕が柔道部で体を鍛えたい旨を話そうとする。

「話は竹本から聞いている。準備運動が終わったら係り稽古を始めようか」

取材の方法など、沢村さんはすぐに企画し、竹本さんが段取りをすべてつけていた。何もかも、僕を戸惑わせないようにしていた。

『そんなに忙しくない』って言っていたけど、沢村さんはポケットにレコーダーをしのばせ、すべての部活動顧問や選手など活発に

インタビューを行い、同じ三年生部員の岡祐子さんが写真撮影をし、竹本さん



新聞部長山下慎一郎『抜擢』

第三回 初めての取材

作：藤堂俊介

画：SABO

は、あの言い回しを使い、先生、生徒会との打ち合わせ、そのほかの三年生と二年生は、月に三回の発行体制を維持できるように、役割分担ができていた。忙しいのではなく、忙しく感じないと言うのが正しい。

柔道着に着替え、準備運動を始めた。それが終わると先生が僕の紹介をした。

「この前入学した、



山下慎一郎君だ。新聞部の部活動取材も兼ねて練習に参加する「初めまして、山下慎一郎です。中学時代、柔道をしていました。

よろしくお願ひ致します」

そう言うと頭を下げた。二年生たちは『本当に大丈夫なのかな』の表情を見せていたように感じた。背が高くて体格もいい部員がいたから、比べるとどうなるかな。

係り稽古が始まった。

最初の相手は背も高く、筋肉質で体格も良かつた。うらやましいなと思いながら『お願いします』と例をしてから組もうとした。

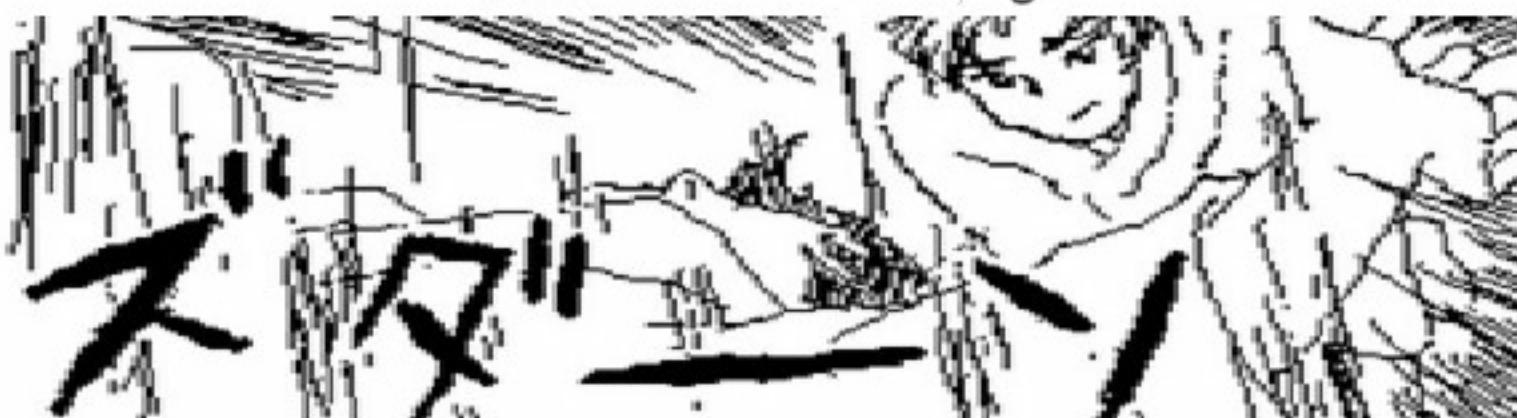
「さあ、おチビちゃん。かかってきなさい」

はつきり僕の耳に届いた。一番、気にしている言葉。何でそんなことを言うんだを心の中でつぶやいていた。

すかさず足払いをかけ、背負い投げをかけた。うまく決まりすぐに絞め技をかけた。

「おい、山下。もういい」

松村先生の声とともに、引き離され、我に返った。



相手の上級生は気を失っていた。
先生が背中をポンと叩くと、気がついた。
予想外の動きで困惑した表情を見せた。
まさか、僕のような小さな相手から倒されるとは思ってなかつたと言う声が聞こえてきそうだつた。

周りの上級生たちも練習を中断し、彼の前に集まつてゐる。

『あの小さな一年生、結構強いな』
が耳に入った。

相手の名前は、村井貴幸さんと言つた。
柔道部の主将だつた。

「二人ともこちらへ来なさい」

折り畳み椅子に座つて
いる先生が呼ぶ。上級生たちの視線が集まつてゐるようで、周囲を見るのが怖かつた。
沢村さんに岡さんは、冷静に様子を見てい
た。

なんだか、申し訳ないな・・・。

折り畳み椅子に座っていた先生の前に、

二人は正座した。先生が大きく、怖く感じた。先生は僕より少し背が高くて、

村井さんのような大きな体格に感じた。

先生は、まず僕に、

「山下。いい技の連続だ。しかし、

柔道は、怒りでやつてはいけん」

怒りを全面に出していたことを、穏やかに指摘された。厳しく叱責される予想をしていていたのに意外だった。

「ごめんなさい」

先生に頭を下げた。

「村井。相手をなめたらいかん

ぞ。それに『おチビちゃん』

と失礼なことをいつたら強く

ならんぞ」

村井さんに、少し強い厳しい口調で指摘した。先生には、一番気にしていること

を言われたのに気がついたようだ。それを失礼だと、きちんと叱ってくれた。

改めて松村先生はすごい。

竹本さんが、

『あの先生に接すると良さが分かるよ』

と、穏やかに話していたのを思い出した。

竹本さん、和田君の言付けは、かつ部活動取材をしたいだけだった。

村井さんは先生に『すみません』の言葉とともに頭をさげていた。

見下していたと感じた村井さんは、すぐに、

「山下。ごめんな。俺の三つ下の

弟に似ていたから、つい言つてしまつたんだ。

そいつのニックネームなんだ」

失礼な発言をわびた。本当に悪かったという表情を感じとれた。

よく考えたら、『何で?』と聞けば良かったことだった。この性格を直さなくては。

「僕も、怒りで投げ飛ばしました。

「ごめんなさい」

頭を下げるあと、村井さんと見合って、いつの間にか笑い出していた。

「よし、これで終わり。練習に戻つてよし」

竹本さんの言うとおり、松村先生は違つた。大人になつたら、先生のような大人になりたい。そのとき、

はつきり脳裏に刻んだ。沢村さんのほうを見ると、

笑顔でうなづいていた。この取材から村井さんと

は親しく話せる間柄になつた。

「あの先輩をいきなり倒したのは

そんなんにいないよ」

「そうなんだ」

「あの身のこなしすぎがかった」

三年生の大村さんが驚きを見せる。

「実はね・・・・僕にチビつていふ言葉が聞こえたんですね」

「私たちも、山下君の体格で大丈夫かなと思つていたの。村井もつい言つたかも

女子部員の三年生、三芳さんが明かしてくれた。

「僕もそろかんと思つて、村井先輩に謝りました」

この会話で、僕と部員たちは、お互いの様子見から、会話が弾んでいた。

沢村さんも岡さんも、話の輪に入り、雑談に近いインタビュー取材をはじめた。

三芳さんが言うには、東高校の柔道部は、上下関係は緩かつた。

その代わり、△挨拶はしつかり。相手を思いやる。自分を磨く。△のきまりをかなり前から実践している。彼女は取材手帳を見せてもらうと、三十年ほど前からのきまりと知った。

この出来事は最初の新聞部としての取材となり、取材ノートに感想を含めて書き留めている。



「初めての取材、おつかれさま」

「一人は僕に声をかけた。

「ありがとうございます。有意義

な取材になりました」

「山下君つて、誰とでも仲良くなれるんだね」

岡さんが言う。

「中学時代は、消極的で友人が少なかつたです」

「そうだったの。初日で柔道部の部員と話が弾んだのは、初めてかな」

沢村さんがいうには、新入部員は、上級生の取材のしかたを見てから、徐々になれていくという。

「そなんですか」

「あとは、取材ノートから記事を書く手順を教えるだけでいいかも」

翌日の昼休み、二年生の部員から取材ノートの整理のしかたを習つて

いると、竹本さんが横に座つて声をか

けた。

「初めての取材お疲れさん」

「きのうは有意義な取材ができました」

「村井を倒したつて、強いんだな」

きのうの話が三年生の間で、話題になつていただろうか。

「それほどでもないです」

「友人なんで、昼休み話していく

れたよ。取材に来た、あまえの部の一年生は、柔道強いなつ

て

「あれは…」



「気にしなくていいよ。あいつも悪気はなかつたんだ。いやつだからよろしくな」

「ありがとうございます。村井さんって強くていい人でした。もちろん、僕を取材に行かせてくれた竹本さんや、沢村さんも」

「ありがとう」

にっこり笑って僕を見た。沢村さんも同じように笑顔で僕を見ていた。



学校が始まつて、二週間以上たつた。このところ忠の表情が暗いような気がする。毎朝、七時四十五分に家を出て、登校する日課は、高校になつても続いている。学校に行きたくないの意識が、

しだいにはつきり伝わってきた。

作：藤堂俊介
画：SABO



新聞部長山下慎一郎『抜擢』 第四回 忠入部

かけに仲良くなつた林真一君の友人、田中利幸君と浜中浩二君が、同じグラスだった。すべて新聞部の仲間。昼休みに聞いてみよう。

「浜中君。川野君、教室ではどうしているの？」

「普通に、周りの人と話

している。それに、ふざけて笑わせたり」

浜中君が、忠の様子を説明する。

「ただね…」

田中君が沈んだ表情で付け加える。

「休み時間、野球部の三年生と、時々言い争つていてるようなんだ」

やつぱり……。中学時代から野球部で活躍して

いた忠にしては、何かおかしかった。

「ありがとう。三年生といふところ見た
ら、僕に教えて」

「忠君。どうした
の、最近元気な
いよ」

「え、そう。大丈
夫」

「なら、いいんだ
けど」

短い会話で終わつ

たものの、大丈夫に

は、ほど遠い。

そう言えば、入学の

次の日に、声をかけてくれたのをきつ

「いいよ。すぐにメールする」

二人は快く了承してくれたあと、田中君と浜中君の話を聞いているうちに、忠に危険が迫つて孤立無援にいる気がしてきた。

そのメールは、放課後にやつてきた。

三年生の野球部員数人と、体育倉庫と

体育館の間にいるとの内容だった。

僕は急いで、田中君が待っている場所に向かった。

「教えてくれてありがとう」

「林君が見ているから、急ごう」

林君がいる、体育倉庫と体育館の間、ほとんど誰も来ない場所だった。

僕たちは、体育倉庫の影から、三年生たちの様子を、うかがつていた。

忠を二人の三年生が取り囲んでいた。

「おい！ 監督に言つた
だろう！」

三年生の一人が、怒鳴つている。
忠は頭を振つた。

「嘘をつかないほうが
いいぞ」

「林君、何かあつたら、誰か

呼んで来て」

「わかつた」

僕は、忠の前に行くと、

「何している！」

「おまえ誰だ！」

「誰でもいい。川野君が、
監督に言つていないと、
何度も言つていてるん
じやないか」

三年生をにらみ言つた。

「野球部でないものが、何で知つて
いる」

「さては、このチビが監督に、タバ

コを吸つたと告げたんだ」

「僕は、タバコは知らない。それに
チビってなんだ」

僕の剣幕と三年生のにらみ合い。下手を
すると衝突寸前だ。

「慎一郎。無理するな」

忠が叫ぶ。

突然、

「やめろ！」

の声が聞こえてきた。柔道着姿の松

村先生だった

「大丈夫か、山下」

「先生、何ともありません」

「どうして、三年生とにらみ

合ひしていたんだ」
松村先生は、優しく聞いてき
た。

「はい。僕の友人、川野君
を助けるためにです」

三年生たちが目をそらした。
松村先生を呼んだのは林君
だつた。体育教官室から、柔道
場へ向かうところだつた。

「林君、ありがとう。助
かつたよ」

「俺もどうしようか、
焦つていたんだ」

「本当にありがとう」

僕は素直に言つた。あのとき

松村先生を呼ばなかつたら、
どうなつていたか、身震いし
た。林君は

△大事な友人だから△
照れながら言つた。

入学後すぐに、出身中学校以外の生徒から、はじめて、声をかけてもらった林君や田中君は、なんだか幼馴染みか、小学校からクラスメイトだったような気がする。

気がする。

「慎一郎。すまん、迷惑かけ

けて」

忠が頭を下げる何度も誤る。

「気にしなくていいよ。
僕の大事な友人が困つ
ていたら、助けるのは
当たり前だよ」

松村先生と野球部の監督、大浦
先生が僕のもとに来た。

「山下君つて君かな」

「はい、僕がそうです」

大浦先生が声をかける。

「部員が失礼なことをし

たね」

「お互ひ、熱くなつただけです」

「それなら、相談室で話を聞こうか」

「はい」

僕の隣に、忠、林君に田中君。ちょっと離れて、三年生の丸山悟さんに、伊良林(いらはやし)義徳さん。正面には、先生たちがいた。

「どうして、言い合いして
いたんだね」

「川野との話に、いきなり
割り込んだからです」

丸山さんが口を開く。

「山下が、そんなことする
生徒とは思わないんだ
が」

松村先生は、あきらかに僕を
かばっている。

「山下君は、俺と先輩たち
ですごい剣幕になつてい
たから、助けに入つただけです」

忠が口を開いた。

「どうして、こうなつたんだ」

「それは、野球部員が、タバコを吸つていたと、

俺が密告したんだろうと疑われていたんですよ」

「おまえだろうが！」

伊良林さんが立ち上がって怒鳴る。松村先生が『座れ』と強めに言った。

「私は、野球部室周辺に、吸殻が落ちていた件を、この前集めて言つただけだぞ」

大浦先生も、松村先生と同じように強く言った。どうして、忠が三年生から疑われるんだろう。

「丸山さんに、伊良林さん。川野君は、何度も知らないって言つていたよ。僕は、その言葉を信じたんだよ」

「三年生の間では、川野が話してから、話が大きくなつた」

丸山さん、僕の質問に答えた。

「仮に、吸殻が見つかつたと、川野君が言つたとしても、監督は、先輩たちを疑つたの」

「それは・・・」

言葉に詰まつっていた。大浦先生は、さつき『部室周辺に、吸殻が落ちていた』のみを言つて、誰が吸つたのか、問い合わせていない。

念のために、先生に質問した。

「先生、誰がタバコを

吸つたと、野球部員たちを問い合わせていません

よね」



「山下君の言うとおり、時々、吸殻が落ちているから、校内禁煙に気づいていない、卒業生や保護者が吸つていないか聞いたつもりだ」

やっぱり……勘違いして、忠を疑っていたんだ。

「川野君は、僕に気を使つて、先輩たちの

疑いを隠していました。そんなに疑

うつて、先輩たちが吸つていたんです

か

三年生二人は何も言えなかつた。

「慎一郎、隠してごめん」

小声で僕に言つたあと、先生たちのほうを向いた。

「俺は、吸殻の話は、監督から聞いて、初めて知りました。それから、先輩たちが
疑つてきました」

「そうか・・・」

大浦先生は、腕を組んで考え込んだ。

「もしかして・・・」

田中君が口を開いた。

「部室の近くで、何人かの人気が、タバコを吸つていたのを見た。そのうちの一人が、川野さんそつくりな体つきだった」

「そうなの」

「よく見ると、大人だつた」

田中君のこの情報で、二人は勘違いしていたことがはつきりした。

「その日は、後援会が見に来ていたんだ」

丸山さんが思い出したように、口を開く、OB会に後援会の人々が差し入れを持って練習を見に来ていた。禁煙に気づいていない、保護者がいたようだ。

「これで原因がわかつたな」

大浦先生が目を開き、三年生たちをにらんだ。

「山下君。すまなかつた。川野君、疑つて悪かつた」

まず、丸山さんが、僕に謝ってきた。チビと言われて怒りはあつたけど、事情が分かれれば、ケンカいでた売り言葉。

それに、チビと言われたくないでぐに激昂する僕も冷静されは村井さんと話しているうちに気がついた。直していくこう。



「川野君、勘違いしてごめん。山下君、ひど

いことを言つてごめん」

伊良林さんも謝った。忠も、謝罪を受け入れたようだ。

「僕も、冷静に聞けば良かつた

んです。ごめんなさい」

村井さんとの和解の時のように、僕と三年生の二人は、謝りあつたあとは、笑顔になつた。下級生に厳しいと聞いていたけど、気さくな人たちだと感じた。

「後援会長には伝えておく」

大浦先生は、そう言つたあと、

「川野、先生も川野の異変に気

づけなかつた。申し訳ない」

忠に謝罪したあと、野球部を続けるか尋ねた。

「部はどうする」

「野球をしたくて、部に入りまし
た。でも、ここまでされたの
で、退部させてください」

「わかつた」

こうして、忠は野球部から新聞部へ移つた。

翌日から、丸山さんと、伊良林さんは、僕によく話すようになった。野球部の取材をいつでもおいでと、勧めてくれる。

沢村さんも竹本さんにも、二人からの取材要請を取り付けたと伝えておいた。一人とも、『キャプテンは下級生に対しても、ちょっと厳しいのに、よく仲良く話せるようになつたね』と驚いた。

忠が、入部届と出すと同時にいきさつを沢村さんたちに話した。

「それは災難だつたね」

「慎一郎がどうなるかって心配でした」

「そうだったの。よく、山下君押さえたね」

「お互い謝って水に流しまし

た。先輩方も勘違いと

分かつたんですから」

「そうだったの。このことは私たち限りにしましよう」

三年生の部員しかいなかつたので、この話は、僕たちと野球部の二人それに監督と松村先生限りとなつた。

丸山さんたちがタバコであんな振るまいをしたのは、話が大きくなり、大会に出られないのではという焦りだつた。

忠が野球部をやめた理由は、僕の誘いで新聞部に入つて、他のスポーツをしながら体験しながら取材をしたくなつたから、**△移籍△**した

と、他の部員に紹介された。

忠の趣味はカメラ。写真を撮るのが好きな彼は、野球部か新聞部か

どちらにいこうか悩んだと、部員たちの前で明かしてくれた。



忠、松村先生も、
山下には不思議な
「何か」がある。
をよく言うようになつた。そんな力なん
てあるのかな。

それより、忠は父親からカメラを譲つ
てもらい、自己紹介で、**カメラ担当**
は俺に任せて。立派なカメラを、

首にさげて力こぶを見せた。
忠のこのしぐさは、部員たちの記憶に
残り、

△力こぶの川野君△
と時々言うようになった。





新聞部長山下慎一郎

『抜擢』

第五回ささいな言葉

作 藤堂俊介 画 SABO

二年生の若葉良輔さんは、同じ新聞部。身長は僕より少し高く、太っていた。特技はパソコンを使い写真加工や動画編集、それに新聞をパソコンですべて作るようになつた、二年生の仲間たちの一人だつた。部室では、記事の書き方や、取材のメモから記事に起こす方法、趣味の天文の話をよくしてくれる。天文部と共同で連載を担当している。



僕もこの手の話は大好き、会話を楽しみにしていた。

ある日、きょうの天気の話題が出た。つい、僕は、

「僕より太つていてうらやましい。
強い風が吹いても、大丈夫だね。」

そう言つてしまつた。

「そうかな・・・・」

若葉さんは苦笑しながら、その場は終わつた。

翌日、若葉さんの友人、それに二年生の新聞部員に、

一年生の山下から、
僕の体型をからかわ
れた。風が吹いても飛ば
されないは 酷い！

と不満をぶちまけた。この時、もし、僕が
いたら殴り飛ばされても、仕方ないほどの
激しい怒りだつたという。

誰が投稿したのかは

分からぬ。メッセージ

アプリを介してこれが

大きくなり、二年生の

部員間で、僕を避けよう

との申し合わせにまで進

んでいた。

村井さん
を盾にして、
調子に乗つて
いる！

行動で出して来たのは、若葉さん
に話をして次の週、月曜日の朝、二年生た
ちが僕の方を見て、ひそひそ話しているの
に気づいた。

「忠君。何か僕の方を向いて、何か

話しているよ」

「この前の野球部の件がもれたの

かな」

「でも、野球部の話、あの時いた人
たちや部長たち限りになつたよ」

「慎一郎、何かしたのか」
「何もしていないけどな」

新聞部へ行き、あいさつをしようとすると
二年生たちは知らぬ顔をして移動して

行く。

それでも、僕はあいさつをしようといつ
も親切に教えてくれる、女子部員の大橋
さんからは、

「どうしてこう

なったか、

あなたの心に

聞いてみたら

言葉が突き刺さった。涙がこぼれそうになつた。

どうしてだろう・・・。
なんだろう・・・。

僕はぼんやり教室にいると、

「美佐子、どうしたの」

「一年生のあいだで、こんなやりとりがされていたの」

美佐子はスマホの画面を見せた。

大橋さんをはじめとしたやり取り彼女と美佐子は友達どおり、誤ってこんな文を送っていた。

三年生の村井さんを盾にして、のぼせている。

部長、副部長を言いくるめて、新聞部でやりたい放題……。

美佐子は訳を聞いたけど、

『これ間違いだから消しておいて』だけ返ってきたという。

頭が真っ白になつてしまつた。

当然、勉強や部活も身が入らない。

美佐子や、忠也、この数日、部員の動きにとても心配した。浜中君、真田君、野球部との出来事で信じえる友人になつた林君それに田中君も、授業が終わるたびに、声をかけてくれる。

和田君は、一年生の柔道部員たちに、山下はそういう人ではないと説明していた。本当にすまないと思つていて。柔道部の部員たちは、日頃の僕を知つていて、いつものように接している。

「山下君。大丈夫。何かあつたら、俺たちが助けるから」

普段は物静かな真田君が、話かけてきた。

「ありがとう。少し安心したよ」

氣を使わせないために、笑顔を振りまいた。そうは言つても、落ち着くなど無理だ。一日中、不安が続いていた。昼休み、桜の木がある庭へ。葉桜がまぶしい緑、友人たちと話しているうちに、気が晴れていた。

今日の柔道の取材、つまり、じつもの練習への

参加も無事に終わつた。

あのことが気になつて、投げられてばかりいた。さんざんの練習内容だった。

松村先生からも、『何か心配事があるか』と聞かれたりじだ。

「一年生たちが、なぜか、僕を避けているんです」

心配事がないを言おうと思っていた間、顔が紅くなつていて。

「やつぱりそうか」

の言葉で、隠しごとがわかつてしまつた。

紅くなる表情で隠しごと、すぐにはれる嘘をついているのが、僕の特徴と美佐子が言つていた。先生藻、薄々気づいていたようだ。

「何か、一年生に言つたか」「いえ、思い当たりません」

先生と会話していると、村井さんが僕を呼んだ。

「先生、山下のことは大丈夫です。任せてください」

「どうか、思いあたる節があるのか。任せたぞ」

先生はそう言つて、柔道場を出て行つた。

先生は去り、村井さんと残つた。何人かの部員が着替えて、道場の隅で話していた。

僕と村井さんも、着替えが終わり、先生が座わつていてる折り畳み椅子のところへ行つた。少し膝を痛めている村井さんが椅子に腰掛け、僕は畳に座つた。

村井さんにも、この話を知つてゐるといふ。そこまで、大きくなつてゐることに愕然と

した。尊敬してゐる村井さんにまで、迷惑をかけている。



「最初の練習の日、覚えている」

「はい。村井さんとの

係り稽古ですね」

「あれ、すごかつたな

山下のあの身のこ

なし」

「それほどでもない

です。いつも教えら

れるばかりで

「あのとき、何ができる

たと思う」

「・・・それは、僕の体をからかわれ

たから」

「君も同じことをしたんだよ」

僕は、『えつ?』の声を出して、村井さんの顔を見つめた。

「新聞部に、若葉君いるよね」

「はい、一年生の」

「どういう人か分かる」

「僕みたいに背が低くて・・・」

村井さんのこの言葉で、どんなにもないことをしてしまっていた。

「分かつた。俺が、君へ初対面の日に

に言った『おチビちゃん』

そのものだよ」

「そうです。若葉さんに、

太っていることを…」

村井さんに視線を合わせ

られない。僕の体を言われ

て、怒りをあらわにした

たのに、どんなにも愚か

者だ。

「ごめんなさい。村井さんまで

巻き込んで」

「俺より若葉さんだよ」

「村井。山下君の諭し

方、文句なしだよ」

「翔太か。それは、俺と山下

との最初の強烈な記憶

だからさ」

「それは言えるな」

竹本さんと村井さんは、笑いながら会話していた。僕にはそんな余裕もなく、うつむいていた。

「山下君

とても申し訳なくて、顔をあげられない。小さな声で、

とだけ答えた。

「山下君もやせていて、背
が低いことを気にして

いたよね」

「はい……いちばん気にしています」

「若葉君もおなじだよ。太っているから、風に飛ばされにくいつて、一番気にして
ていることだよ」

「はい……若葉さんから、飛ばされやすいつて言わ
れたら、怒りが止まらなかつたと思ひます」 26

沢村さんと竹本さんは、一年生と二年生の部員たちの違和感に気づいた。その原因が若葉さんと僕にあります、若葉さんに直接聞いた。彼は、体のことを指摘されたから不快だつたを友人たちに直接または、スマホでも話題にした。

すると、一人歩きしたうわさが飛び交い、参加しながらも、どうしようかと思い悩んでいたという。

「山下と俺の立場が反対なら、同じように投げ飛ばしていたな」

村井さんも痛いところを突く。その通りだ。しだいに目から涙があふれてくるのを感じた。

「責めているわけではない
んだよ。言葉は、人を生か
したりするものだよ。一年

生のとき、私も言葉がもと
で失敗したんだ。村井を
とても怒らせてね」



「あの時は、翔太とひと月、口をきかなかつたな。山下にチビと口にした時はまずい

と感じたんだ」

竹本さんの獨特な優しい言い回しや、村井さんの話に、僕は言葉の重みに気づいた。

「ごめんなさい。うかつでした」

部長の沢村さんも、柔道場へやってきた。忠や美佐子も一緒に来た。僕は恥ずかしくて、ますます小さくなっていた。

「山下君。責めるためではないから」

沢村さんも優しく声をかけた。彼女も僕の失敗の原因を美佐子と一緒に、若葉さんから直接聞いていた。美佐子が僕に、

「慎一郎君。若葉さんも、追い詰めようとは考えていないから」

「とても傷つけたから許してはもらえないよ」

「大丈夫。反省している気持ちを伝えれば」

沢村さんが言う。僕はそうかなの表情を見せた。
「山下って、すぐに謝るところがないんだよね」

村井さんが、話に入ってきた。
気づかなかつたこのしぐさを覚えていた。新聞部の人間関係を気まずくしたのは、どう考えても、僕がすべて原因であり、悪いんだ。

「そうですね。若葉さんが許してもらうまで、謝りたいです」

「同じ失敗をしなければいいから、若葉さんに謝ろう」

沢村さんの言葉に、顔をあげ、周りにいる人々の顔を見た。穏やかな表情は、僕に謝らせる勇気をたくさんもらった。



「若葉さんに謝ります」

きつぱり言った。すると、若葉さんが柔道場に入ってきた。心臓が止まりそうだった。

「ごめんなさい」

頭を何度も下げる。僕が見せられる精一杯の反省の意思だった。

若葉さんから、どんなに酷い言葉、それに殴られたとしても受け入れよう…。

慎一郎君、もういいよ…。

若葉さんのやさしい声が聞こえてきた。

許してもらえるんだ。

許してくれるんだ…。

「慎一郎君が、いつもうらやましいと思つてゐるんだ」

「え、なんなんですか？」

「もちろんだとも、華奢でも、あんなに

元気で勉強・部活にがんばっている 28

姿に、僕も勇氣をもつているんだ。だから、あんなこと言われて、残念だつたな

「…ごめんなさい」

「持病の薬のせいでの太つてているんだ。ほとんどの人は、知つているんだ」

「それは僕も同じです。小さい時は病気がちで、大きくなれませんでした」

「だから、体のこと言われるのはつらいんだ」

若葉さんも僕と同じ、体のことを言われるのがとてもつらかった。何で口なんかしたんだろう。

「太つていて、からかわれたこともあつたかな…」

「もちろんですか…」



「すぐに、友人や兄が気づいて、すぐに

消えたんだ」

「実は僕も同じでした。川野君や若野

さんたちのおかげでなく

なりました」

「お互い、言われると

つらいね」

「はい、身にしました。

本当に「ごめんなさい」

若葉さんは、笑顔で僕を見た。

ありがとうございます。

気をつけます。僕も笑顔で応えた。

「これで、解決ね」

沢村さんは、僕たちに近づいてきた。

「よし、腹もすいたから、いつものところ

へ行くか」

竹本さんが誘う。ここにいる人たちは、みんな笑い出して、彼行きつけの、校門前のお好み焼き屋へ。



竹本さんはお好み焼きに目がないそうだ。

仲直りの印の会と称していただけど、彼と沢村さん、村井さんと三年生の部員を誘い、体育大会の取材の方法、優勝候補の柔道部の話を聞きながら食べる予定が組まれていた。

取材対象の部活動の主将それに、注目選手を含めて彼のおごりで食べながら聞くそうだ。

柔道場を出る、三年生の部員も待っていた。

若葉さんとの貴重な経験を経て、信頼できる友人となつた。

明日、一年生の部員に謝りに行こう。

翌日から、僕への噂は、嘘のように消えていた。

でも、一年生のほかの部員には、とても申し訳なく感じている。

昨日、お好み焼き屋から出るとき、若葉さんが、

「でも、一年生のほかの部員には、とても申し訳なく感じている。」

教科を中心とした話をしていた。毎日、宿題や苦手科目の話を、十五分ほど開いていたといつ。

「慎一郎君、おはよー！」

若葉さんが、気がついてあいさつをする。

「みんなに不快な思いをさせてごめんなさい」

頭を深く下げて詫びた。

『自分的心に聞いて

みたら』と言った大橋さんが

口を開き、

「傷ついたことを言ってごめんなさい。山下君に、きちんと理由を聞いたり、誤解にならなかつたね」

を言つて頭を下された。

僕はすぐさま手を振つて、

新聞部長山下慎一郎『抜擢』作：藤堂俊介
第六回 三球勝負 画：SABO

部室には、若葉さん
をはじめとした一年
生の部員が教科書と
ノートを広げながら



大橋さん違うよ。

僕がこのとき気づか

なかつたのが悪いんだ。

体のことを言われて怒る

僕なのに、若葉さんのこと

言つたから。



三原啓介さんが、僕に頭を下げた。

「実は、山下君への根拠ないメッセージ、

僕が流したんだ。ごめん」

「・・・気にならないで下さい。僕が

若葉さん傷つけたから、でも、つら

かつたです」

率直な気持ちを伝えた。

若葉さんも、あのメッセージを回した三原さん、同調した二年生たちも、とてもつらかったんだ。

竹本さんの昨日の言葉を思い出した。

「山下君と直接、話したらよかつたね」

三原さんは僕に笑顔を見せた。お互い、同じ新

聞部なのに、意思疎通がまだまだと気づいた。

「これからお互い気をつけましょう」

大橋さんをはじめ、一年生の部員に、

ありがとうございます。僕は笑顔で返した。

気がついたら、沢村さんや竹本さん

が、部室に来ていた。にっこりと

様子を見守っていた。



この日から一年生たちと、さりに親しく話せる
ようになつた。カメラやパソコンがとても詳し
僕をはじめ、カメラ好きな忠も話に引き込まれ
ていた。

「野球部取材の連載記事なんて、どうで
しょうか」

一年生の三原啓介さんも賛同した。お互い
謝つてからは、仲良い友人になっている。

新聞部の編集会議で、忠が提案
した。沢村さんがどうしたら
新聞部を活発にできるか、読者
楽しみにさせる記事の議題
だつた。忠が真っ先に手をあ
げた。



今年の野球部は
注目されている
からね。

竹本さんが言つた。甲子園に出
るのは、西高校か、東高校かと噂されている。
「僕もいいと思います。企画を考えま
しよう」



「今回の企画、俺がカメラ
マンやります。
記事を誰か
お願いしま
す」

「記事作成は
僕がします」

僕と忠の、記事、
写真の組合せ
はこのとき生ま
れた。以降、沢村さんのよう
に、新聞部の備品あるポケッ
トレコーダー、彼女に倣つて小

さなシステム手帳を持つようになった。



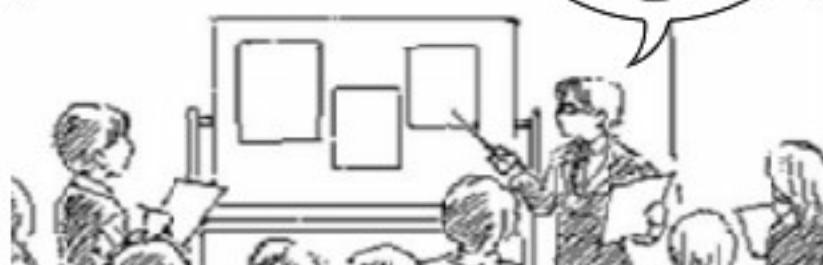
私達、三年生も体育大会終わつたら受験勉強忙しくなるから、新体制の分担決めましょ。



美佐子が、記事編集担当と示している、友人の松山さん、それに桜田さんと佐野さんを、中学時代『壁新聞』が有名だつたからと勧めた。大橋さんも実力はすごいと当時の写真を見せた。写真を見たみんなが感心し、壁新聞作成はこの二人がすることになった。

竹本さんが、白板に案として名前を貼り出し、
このように
したいけど
どうかな。

新聞部体制表		発行責任者
【記事】	2年	若葉良輔 山下慎一郎
		浦上薰
		松山浩輔
【写真】	2年	三原啓介 大橋 恵
	1年	川野 忠
【印刷配布】	1年	若野美佐子 林 真一
		田中利幸 浜中浩二
【記事編集担当】		
1年	桜田良枝	
	佐野 静	
	松山沙織	



新体制が決まった。役割はとりあえず決めてい
る作りやすいから、《全部の役割がこなせる
ように》沢村さんは表を見ながら言った。
発行責任者は、僕がすることになった。
最初僕は、無理だよ》と断った。竹本さんの
《山下君は誰とでも仲良くなれるから
任せられる》の一言で決まった。
《どこまでいけるか分かりませ
んよろしくお願ひします》
僕は照れながら言った。

三年生の岡祐子さん、油木裕次さん、それに
稻佐春代さんは、『安心して任せられるね。
困ったときにはいつでも言つてきて』

そう言つてきた。監督の先生たちの調整と、記事
の校正、一年生の部員との協力で、パソコンの
入力、写真編集など、僕を含めた部員たちの取
材から発行しやすい体制をすべて設けた。

小さな文化部だけど、この会議のあとから、取材
の話、普段の雑談まで、今までよる気楽に、自由
に話せるようになつた。

日曜日には、竹本さんが部員たちを編集会議と
称して、あのお好み焼き屋に誘つた。話して
いるうちにアイディアが出るよと言つていた。
この方式は、僕もその後引き継いだ。



「きょう、野球部をお邪魔していいでしようか」

あの事件で仲良くなつた、主将の丸山さんに話かけた。

「もちろん」

「甲子園予選の向けての記事を、新聞に載せます。あと、川野君も来ます」

「良かつた。では、お願ひします」

事件が解決して以来、野球部のグラウンドに行くのを控えていた忠。丸山さんの《恨みつけなし》を聞いて、忠は目を輝かせた。

「よし、写真を撮りまくるぞ」

「その意気」

放課後、三原さんに大橋さんもカメラを持って、グラウンドに集まつた。

「それでは、決められた場所に行つて撮影しよ

う

三原さんは、時々、野球部の練習風景を撮影していた。どこを撮影すればよいか、何を聞くか、昼休み、忠を含めた四人で配置を決めた。

「川野君は、グラウンドを撮影して」

「大橋さんは、投球練習を」「山下君、僕と監督、キャプテンのところへ行こう。取材はとうするの」

「はい。僕はこのような質問をします」



三原さんにノートを見せる。

構想、何か考えたことを小学生の頃から大学ノートに、落書きのような感覚で書いている。部屋の引き出しには書きためたそれが何十冊もしまっている。

「これいいね。してみようよ」

忠と大橋さんもメモを見る。同じく

『これは面白い記事ができるぞうだね』の声が上がった。

「丸山さん、取材に来ました」

僕が声をかける。

「これは緊張するかもな」

「僕も、緊張しています」

そういうって笑いだし、僕が取材方針を書いたノートを見せる。

「面白いね。山下君大丈夫
なの」

「はい。手加減しないでください

いね」

「わかつた。じゃあ、着替えてき

て」

体操服に着替えて来るから、丸山さんと話をしていくと、忠に言付けて、野球部のロッカーを借りて着替えることにした。

着替えようとすると

と、山下と呼ぶ声がする。振り向く

と隣の席の野球部

員、川口徹君だ。

休み時間によく話

している。

「丸山先輩が、これに着替えてと言つて
いた」

ロッカーから出したのは野球着だった。僕の体に
合つたのを先輩たちは準備していたんだ。

「それつて」

「丸山先輩の二年上に、山下と同じくら
いの部員がい

たって」

「そなんだ」

「その先輩は

有名な・・・

「思い出

した。住吉洋一さんだよね」

「よく知つているね」

「実は、野球も好きなんだ・・・」



東高校に進学を志望したのは、僕のような体格
の人が、学業や運動で活躍して
いたから。本当は、家
から近かつただ
けが理由。

スポーツでは、
住吉さんの他
にバスケットで

活躍していた選手もいた。

「山下、なかなか似合つている」

「そう」

「グラウンドに行こう」

野球着は初めて。取材というより、これから

練習に行く感じだ。

住吉さんは、東高校を甲子園に導いた、小さな
投手だった。新聞にも大きく取り上げられて

「着替えてきました」

丸山さんに僕の姿をみせる。住吉先輩と思って練習と冷やかすから、恥ずかしくて。忠も、同じようなことを言つてゐる。

見せたノートのメモには、練習風景を撮影して、一辺倒なインタビューよりも、記者(僕のこと)が実際に練習に参加する旨の内容を書き、投手伊良林さんの速球を体験する文字も入れた。

柔道部の体験取材

応用したものだけど

ある考え方もある。

「それではお願ひ

します。お互

い遠慮すると取材

の意義が減ります

「わかった」

野球部取材

④予選に向けでの意気込み。

(体験)

伊良林さんの球速を体験する。

バッター：山下 → 全力攻撃で強打する。

3球飛球してもらい打球に挑む。

→ 写真

球速を体験して内容を記録にする。

(体験)

練習に参加する。

又球速に

インタビューより
実際に練習に参加して
みる。

「お願ひします」

伊良林さんは振

りかぶり、球が

放たれると、

あつという間

捕手の受ける

鈍い音がした。

「山下。どう

した？」



伊良林さんに頭を下げた。最初は投球練習。その後、三球勝負する手はずだ。

バッター・ボックスに立つ。体育の授業でソフトボール、軟式の野球は経験があるけど、硬式は初めてだ。どんな球が来るのかな。

立つ前に、伊良林さんの投球練習を見た。はじめ、肩慣らしから始まり、次第に球速を上げてきた。すじいと言いついた僕は、少し震えがした。

「次、お願ひ

します」

周囲は静まりかえっていた。

シャッター音

だけが聞こえる。三原さん、

大橋さんも、しきりに撮影している。

二球目が飛んで来た。バット

を振つた。しかし、空振りになる。

振るより早く、僕の前を通過している。

すごい！

西高校と

どちらが代表になるか、噂されるほどだ。

「三球目行くぞ」

飛んできた速い球に合わせるよう振る。手を激しい振動と、音が聞こえ、そのおかげか、僕は倒れてしまった。



「大丈夫か！」

伊良林さんが飛んできた。

ちょっと間をおいて、歓声

が上がる。

いつの間にか、クラスの仲間、新聞部のメンバーが、人だかりになつていて。恥ずかしくて顔をあげられない・・・。

「かつこよかつた！」

美佐子が声をあげた。撮影

忠も同じことを言う。

三原さんや、大橋さんの写

したものも見せてもらつた。集まつてゐる野球

部員たちも、デジカメの写真を見ながら言い合つてゐる。

『顔が真っ赤になつているよ』

三原さんも、大橋さんも僕を見て言う。かつこ

いいは、恥ずかしいな。

「次は野球部の体験か」

その声は、村井さんだ。

グラウンドの賑わいで來ていた。よく見る？

と柔道部の部員まで。

恥ずかしさ

か増して

来ている。

「球拾いか

らお願ひ

しようかな

の僕の言葉で笑いに包まれ恥ずかしさも和らいだ。

「丸山さん、忠君を体験取材という形で野球部に戻す方法、どうでしようか」

今日の取材目的の一つを話す。

「山下君は柔道部で、練習しているんだ

よね」

「はい」

「俺なら大丈夫。あとは、

川野本人の意思かな」

忠を見て言った。少し時間を

あいて、

「お願いします。新聞部の先輩

は、どうなんだろう」

「新聞部の特集記事が、

毎日出せそうだね」

竹本さんも、この取材を見に

来ていた。



この言葉に、忠は何度も頭を下げていた。グラウンドへ再び戻れる表情があふれている。

「今度の一年生は、すごい人材が来たようだね」

三原さんが、竹本さんの提案に賛同した。

「野球部班を作つたらどう

大橋さんも、話に乗ってきた。

話が進むと、三人は趣味の力メラで一致しているようだ。

「もちろんだよ」

三原さん、忠も了承した。まずは、専従取材という形で、忠は野球部へ顔を出すようになった。



「私も慎一郎君の、取材について回ろうかな」

美佐子が僕を見て言う。

顔が赤くなっているのに気づいた。

「お似合いかもな」

「・・・いい友達だつて」

忠が冷やかす。彼女は資料整理を早く終え、僕の取材ぶりをまとめてメモをする役になっていた。取材中にメモを取りにくいから、美佐子が要点などを記録して

「山下君のメモを踏まえて、野球部
一日密着取材にしよう」

三原さんが僕のノートを見て提案した。沢村さんや竹本さん、野球部のみんなも賛同している。

「お願ひします」

頭を下げて、川口君と外野へ走つて行つた。

この取材は大きな収穫を得た。野球部と新聞部の距離感を縮められた。

グラウンドに入り写真撮影。監督の大浦先生に聞いて記事にする形式から、部員、特に主力選手に、大会への意気込みや決意を気兼ねなく取材するようになつた。

「せっかくだから球拾いに参加してはどうかな」

記事を書ける。



それは翌日以降の話。

外野に向かう場面に戻すと、川口君と外野に着くと、球拾いをしていた一年生たちに声をかけられた。

「山下、伊良林先輩の球怖くなかった」
「野球ができるって知らなかつた」

まずは、僕が野球ができたのか。それに、伊良林さんの投げる速い球を打ち返したことから始まった。

「少し、怖かつたかな」
「本当はものすごく怖かつたんだよね」

隣のグラスの、三芳治雄君が声をかけた。中学三年の時からの友人で、紅潮することの意味を



知っている。

「ばれたか・・あの球は怖い」

そういう話をしているうちに、丸山さんの中年がした。球が飛んで来るようだ。僕の方だ。すかさずうけた。一年生たちが歓声をあげる。

「野球、どこで練習したの」

「住吉先輩の真似をして、

時々・・

「川野君にも教えてもらひつたの」

「忠と休みに遊びながら教えてくれたんだ」

話をしながら、球拾いを続



三原さん、大橋さんも夢中に撮影している。カメラを意識してか、野球部員たちも活気づいている。忠は主力選手を中心に撮影していた。

練習も一段落したところで、今日の取材を終えた。中学時代、消極的な僕を励まし助けてくれた恩を、これで返せて、嬉しかった。

取材を終えて、着替えに行こうとすると、丸山さんと伊良林さんから呼び止められた。

「今日は楽しかつたありがとう」

伊良林さんが頭をさげる。

「僕も、伊良林さんの球速を44
体感して満足です」

「そうか」

「予選突破は大丈夫だと感じました。これからも球扱いに来ていいですか」

「もちろん」

「なら、住吉先輩の野球着あげるよ」
丸山さんがうなづく。
伊良林さんも笑顔を見せていた。

「ありがとうございます」

何度も僕は頭を下げた。とても嬉しかった。

「やつぱり山下は不思議だよ。この前

あんなにたぐみ合つたのに、仲が良くなつている

「ほんとだ」

「山下君に部を任せられぬ」

そう言えばこの言葉、前に
も聞いたことがある。

そんなに僕って不思議なの
かな。

「どうした」

丸山さん、それに伊良林さ
んも心配そうに顔を見てい
る。

「僕は不思議なのがなと
考えていました」

「気にしない。取材よろし
く

「お願ひします」

グラウンドで取材を見ていた
三年生たちは、話はじめて
いた。沢村さんが言い始め、
竹本さんも、につづりして
《もちろん》の表情を見
せながら、

「村井と親しくなつて時から、
考えていたんだ」

「私たちは、一、二年生を
支える役に回つて新聞部を
盛り上げていきましょう」

三年生の他の三人も異口同音に唱えていた。
そのような話をしていたとは、思つてもいな
かった。

翌日、昨日の取材の写真、

それを取材メモ、ノートなど
もとに、記事にする準備を始めた。
入学式卒業式などの大きな
行事、月三回の定期発行から、

週に一回出して新聞部の活性化と、
国語の力をつけよう。顧問の

増田先生が編集

会議に参加して、

考へを述べた。読まれずに机の中

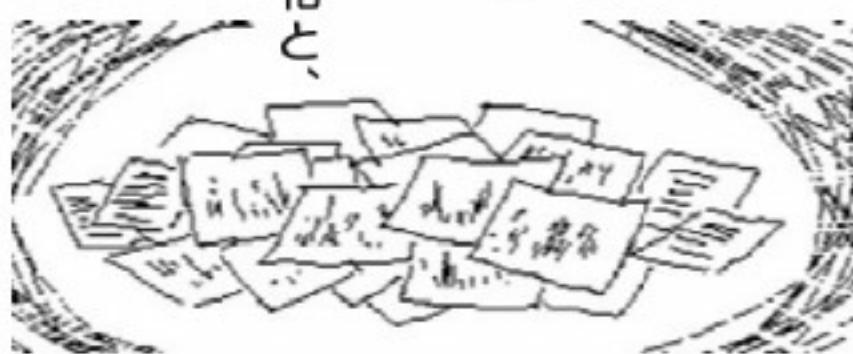
に放置されたまま、もしくは、

友人からつまらないと言われた沢

村さんが、竹本さんと話し合い、

増田先生に提案したことから始

まり、この前決めたことだった。



「どの写真にする」

三原さんと大橋さんがパソコン画面を見ながら、
話していた。忠も後ろから見ている。

「慎一郎との勝負のこれ
がいいですね」

忠が画面を指差す。伊良
林さんが三球目を投げ
僕が振ろうとする写真だ。

「伊良林さんのいい



「これを最初の記事にしよう」

「その写真に合う記事ができたよ」

松山さんと浦上さんが、原稿用紙に、僕と美佐
が書いたメモを元に記事を書き、若葉さんが
パソコンに入力していた。そのプリントアウト

をもうい目を通す。

伊良林投手 さえり剛速球

表題通りだ。あの球は怖くな
るほど速い。

「最初の記事の表題は
これにしよう」

三原さんは、出力した写真

原稿を見ながら言った。

記事担当と写真担当で、
赤ペンを持ちながら読み合
わせを始めた。

誤字脱字の発見、表現の点検を行
う。新聞部の伝統と言われている作業
だつた。ただし、僕たち一年生
が慣れるまでは、三年生と
組んで行う。文章力や読解
力が鍛えられた。

すべての点検が終わると、
パソコンにある文書を開いて
修正。その後、新聞の段組に
流し込んで出来上がりとなる。
最初の面には、三球目の場面。
スイングしてボールが当たる写真を大きく

使っていた。

新聞も刷り上がり、明日

の配布に向けての準備に

入った。壁新聞もできあが

り、そちらは学校の掲示板に

貼る。美佐子が友人の二人

を部長に推薦するのも分か

る。とても良い出来上がり

だ。

「うまくできただね」



新聞は一人の力では無理だ。全員の協力が必要だ。

「そうだ。部長と
売店に行こう」

竹本さんが誘う。

沢村さんも促した。

「お誘いありがとうございます」

二人の勧めに僕を含めた三人で売店へ。

部室からそう遠くない場所にある。

「山下君、飲んで」

竹本さんがいつも飲んでいる、ミルクコーヒーを勧められた。

「ありがとうございます」

コーヒーを受け取り、中庭へと向かつた。

新聞部長山下慎一郎『抜擢』

第七回 自分らしく

作：藤堂俊介
画：SABO

澤村さんが声をかける。
「みなさんのおかげ
です」
僕は頭を下げる。



ベンチに腰かけた沢村さんが一口飲んでから、

「山下君。実はね。あなたに次の部長を
して欲しいの」

「え？」

沢村さんの顔を見る。

「慎一郎君なら、きっといい新
聞部ができるよ」

竹本さんもコーヒーを飲み干してから
話しかけた。

「僕には荷が重すぎます」

「村井と仲良くなつてから、部長
に話そうと決めたんだ」

「そうなんですか？」

「若葉君との仲直り覚えている
よね。あれを見て慎一郎君を

部長にと話したんだ」

「大丈夫なのかなどの意見
が出たけど、この前の

野球部取材で決めたわ」

「丸山や伊良林も言つて

いたなあ。いると
なぜか楽しくな
るつて」

「でも、僕は中学生
の時は、引っ込み
思案で、あまり友
達が作れませんで
した」

「大丈夫だよ。今は仲間が増えた
じゃないか」

竹本さんの顔を見た。気がつくと、消極
的な性格が、少しだけ……



いや、かなり前向きだ。

「私たちの卒業までは、三年生の部員、それに昨日、二年生を集めて、山下君を中心に新聞部を楽しくしましょう」と話したわ」

沢村さんの一言はとても嬉しかった。「ありがとうございます。こんな僕に・・・」

なぜか涙が溢れてきた。人前ではあまり涙を見せたことないのに。「泣かない。部長に向いているよ。三原君、若葉君や大橋さんなどの一年生も推していたな」

「本当ですか」

竹本さんの言葉を一瞬疑つた。



「誰とでも仲良くなれるって
うらやましいを、丸山や伊良林も言つていたよ。それによつち
を認めたらすぐに謝るのは、
見習いたいとね」

「そうなんですか。気づきません
でした」

「気になら、慎一郎君らしく
なくなるさ。なぜかを追及す
るより、一生懸命すれば分か
り始めるよ」

残りのコーヒーを飲んでいる間、入学
から今この瞬間までの記憶がよみが
える。

△なせがを追及するより・
言われる通りだ△

「部長の件、受けます。

よろしくお願ひします」

二人に頭を下げた。

「俺ら三年生は、慎一郎君

を中心とした、一・二年

生が支えるから、心配し

ないで」

「ありがとうございます。

沢村さんと竹本さんに

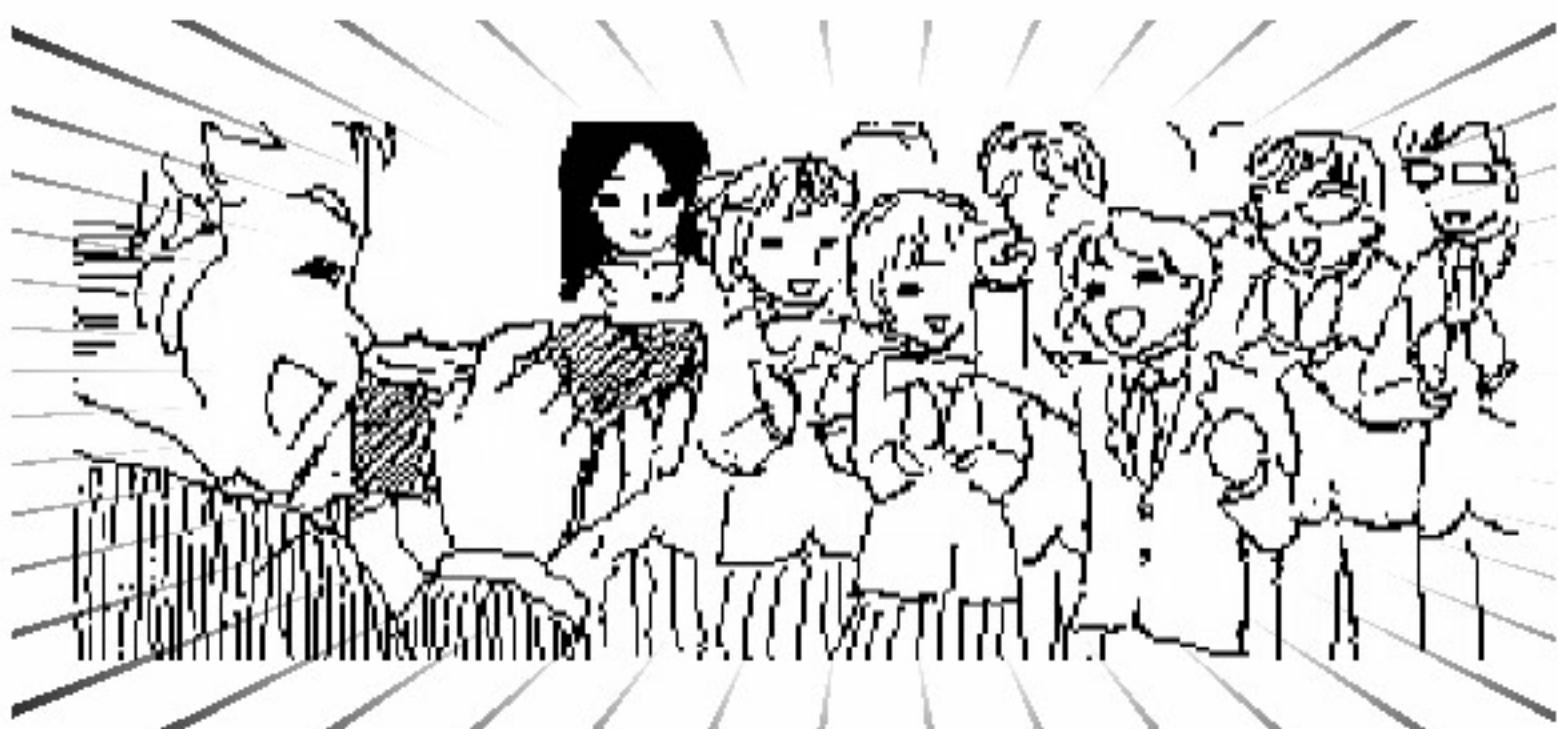
知り合えて良かつたで

す」

「きまりね」

「そうだね。山下慎一郎

部長よろしく」



竹本さんの言葉で、みんな一斉に集まる。忠が撮影している。

「おめでとう。

山下部長」

お祝いの言葉に包まれる。

「こんな瘦せて力のない僕ですが、精一杯やらせていただきま

す」

「慎一郎、固くならぬ。

今まで通りいこうぜ」

忠がファインダーをのぞきながら言い出す。僕を中心とした記念撮影になる。

「まだね。それじゃ、張り切つていこう」

こうして、僕は部長を引き受けた。
今、考えるとみんなから僕が毎日していることを見込まれて、**抜擢**
されたんだ。東校創立から60年近く続く部。初めての一年生部長。
諸先輩方に恥じないように頑張ろう……。

ばってき

でも、何から
始めよう
かな。



帰宅して自室のベッドに
転がり天井を見つめた。

中学時代、生徒会の副会長の
経験は貴重だった。それでも
自発的にもしくは誰かに推さ
れて立候補したとは違う。

手を上げる者がなくくじ引き。

忠の応援演説で爆笑を取り、

一年生の候補に大差をつけ当

選・・・。

でも今回は違う。尊敬する先
輩方が推したんだ。

これから野球部取材の記事が
増えるから、それを中心に
発行していくかな。まもなく
予選も始まる。

二週間後の総合体育大会、どの
ような取材をしようかな。

「慎一郎」

父の呼ぶ声がした。今日は定時で帰ってきたんだ。

「どうした。表情が冴えないな」

「…お父さん。僕、新聞部

の部長に決まつたんだ」

「それは驚いたな」

「心配なんだ。人をまとめられるかなって」

起き上がり、父の顔を見た。そう言えば、異動があり忙しくなり、話す機会がなかった。何かしら老けたようだ。

「俺もそうさ。人の上に立つのは責任も

出てくる」

「うん、分かつていいよ」

「自分らしさを失わず、常に話し合い、決めるところは決める。これでいいんじゃないかな」

沢村さんが話したことと同じだ。心配するより、してみなければ分からなんだ。

「お父さん、ありがとう」

「入学してから、慎一郎が明るく積極的になつたから、大丈夫」

中学時代、消極的な僕の性格を両親はとても心配していた。

小学生の時は、病弱でよく熱を出し救急車を呼んだこともある。親には苦労ばかりかけている。

父の喜ぶ表情は、とても嬉しい

「ご飯できているから、降りてきて」



夕食後、部屋で父や先輩たちのことを考えているうちに、夢の中にいた。

これは夢だと胸を撫で下ろした。

54

真夜中、部員たちから囲まれ失敗の責任をこれと詰め寄られないとこりで目が覚め、沢村さんや竹本さから、

『部長にとしては、力が不足している』の強い口調に僕は目が覚めた。生々しい場面ばかりで目がうるんでいた。

悪夢を何回か繰り返しているうちに若葉さんが『許すのをやめた』と怒りだし、何度も謝りをいれても許さない一邊倒になり、そこで飛び起きた時は、寝汗をかいていた。四時半を指し示す時計を見て、



空が明るくなり始めていた。
七時四十五分になると、忠がいつものようく玄関にいる。あと三時間ほど。予習や復習を済ませてしまおう。
机の上には、メモや思いついたことを書き留めているノート、沢村さんに倣(なら)い予定を記入しているシステム手帳を置いていた。

考えや取材のメモを読み返す。読み終えると、ペンを取りだし、新しいページを開くと、



の文字を書いていた。

書き終わると自然と自信が
わいてきた。

次の行からは、野球部と総合
体育大会の記事をどのように
構成しようかの考えが出
てきた。

数ページにまとめることを、
放課後みんなに提案しよう。
ここまで終ると、今まで
の不安が嘘のように消えた。
さあ、予習復習を始めない
かないと。

日が射しこみはじめた窓に
目を向けた。澄みわたる青
がとても新鮮に感じた。

部長第一日目

自分らしく
やっていこう



平成二十八年十二月九日 第一版

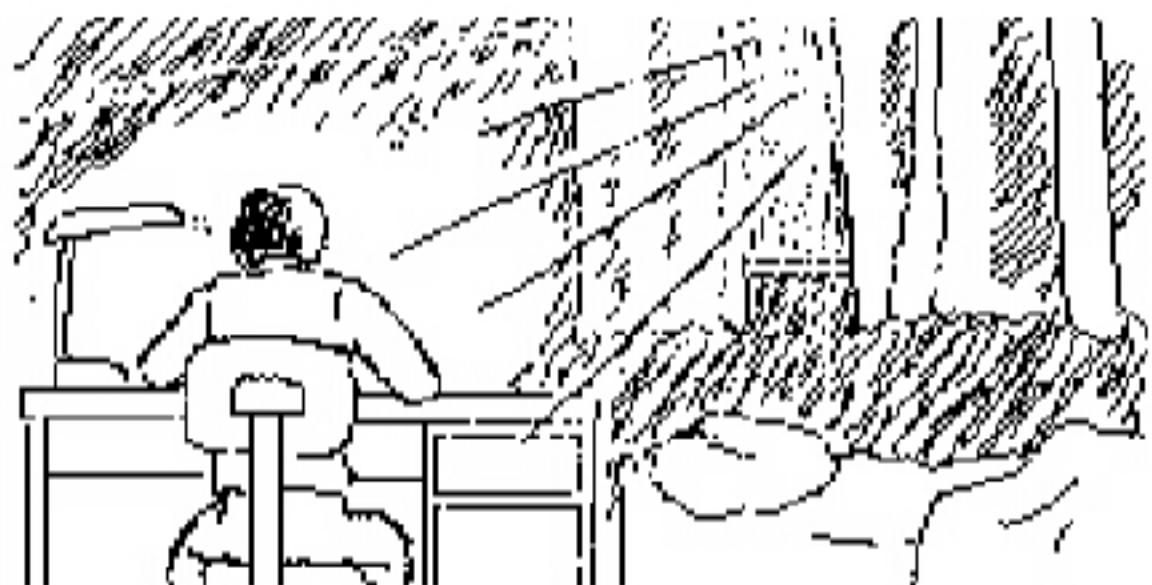
作 藤 堂 俊 介

画 S A B O

写真 日刊NANZO写真班

画面設計 日本モナコム

本作は架空の物語です。



新聞部長山下慎一郎『抜擢』

終

作者／作画担当から

手軽な電子文具としても活用できる
コミック工房の高度な活用法として、
小説の文章からイラストにする『文章具
現化計画』を企画致しました。
作画担当のSABOさんの的確なイラスト
で登場する人物の息づかいを感じます。

この場を借りまして、自由度が高い
ソフトウェアを提供していただいた、
コラビ工様、任天堂様、絵を提供してい
ただいたSABO様に改めて御礼申し上げ
ます。

文
藤
堂
俊
介



こんにちは。作画担当のSABOです。
漫画やイラストに特化した工房ツールでの
小説化。

キャラクターの具現化で、どこまで文章
からイメージを引き出せるのかが私の役割
と思っています。

描き分けが出来ているのか不安ですが、
小説を読んだ方の頭の中に文章と共に動いて
くれていれば幸いです。

つたない絵ですが、もうしばらく宜しく
お願ひします。



画
S
A
B
O